

世間には往々にして日本文化の特質を批評して、單なる模倣文化にすぎないとし、日本民族の獨創性を否定するものもあります。例えば、ヒットラーの如きもその一人で、『我が闘争』——マインカンプーという論著の中で、はつきりこの見解を述べております。いつたい獨創ということは孤立した智識思想によつて案出せられるものではなく、たえず周圍の文化と接觸してそれに通曉し、その上に自己の工夫や情操をつみ重ねていつて、はじめてその境地に達することができるものと思ひます。従つてそれは僅かの時間でできることではなく、長い間にわたつてたえず異種の文化と接觸し、自己の文化水準を高めることが、缺くべからざる必要條件であります。日本の歴史を回顧いたしますと、平安時代宇多天皇の寛平六年（八九四年）に、遣唐使の派遣を廢止せられました。それは、その以前から唐が亂れていて、遣唐使や留學生をやつてもその効果がないこと、及び日本の文化が既に進歩して、唐に學ぶ必要も少いという自負心から出たことと思ひますが、ともかく、これによつて、以後外國文化の流入は殆んど杜絶したのであります。その後、鎌倉時代や室町時代には、若干彼我の交通が回復されて、元・明の文化との接觸が僅かながら行われましたが、それもまた頓挫して再び徳川時代の鎖國の状態となり、明治時代に至るまでは、殆んど、外國と接觸しその文化を輸入する機會がなかつたのであります。明治時代に入りましてからは、新たな機運によつて盛んに世界の文化と接觸し、日本文化の水準もだんだんと高くなり、漸く創造力を發揮しようという段階に達した時、不幸にして今次の大戦に突入し、すべて崩壞の運命に陥つた次第で、まだ大いに獨自の文化を創造すべき條件に恵まれなかつたと云い得られましよう。この點、歐米諸國が古來たえず密接な交渉を互の間に持續して來た事情と大いに異つたところがあり、従つてその進歩發達の步調の緩慢であつたことを認めなければならぬと思